祇王と祇女の物語

ふるさとでの暮らし

田畑が広がる野洲市北と中北の間に、大きな屋敷の跡があります。

この場所には、今から約 850 年以上もの昔、平安時代といわれるころ、祇王と祇女という姉妹が生まれ、なかよく育った屋敷が建っていたのです。

祇王と祇女の父である橘次郎時長は、京の都からの命令で地方の政治を行う役人でした。時長は、田畑を耕してくらすふるさとの村人たちをたいへん大事にしました。

そのころ、ふるさとの村では、水不足から十分に稲が実らないことがよくありました。時長は、米が納められなくて困っている人たちや、食べるものがなくて苦しんでいる人がいれば、まるで家族を思いやるように親切にしたのでした。

村人たちは時長をとても頼りにし、心から尊敬しました。祇王と祇女は、頼もしい父とやさしい母にいだかれて幸せに育ちました。

しかし、1156 年（保元元年）に起きた保元の乱といわれる戦で、時長は戦死してしまったのです。時長が亡くなった知らせを聞いた村人たちは、二人の幼い姉妹やその母と一緒になって涙を流しました。

京都へ

そのころ、地方の政治を行う役人は、男の人がすると決まっていました。時長に代わる新しい役人が来ると、祇王と祇女は、母とともに、生まれ育った屋敷から出なければなりませんでした。父を失った家族は、これから先どうやってくらしていくのか困りましたが、心やさしい村人たちの世話で、ふるさとでのくらしを続けました。祇王と祇女は、村人たちの温もりにつつまれてすくすく育ちました。

しかし、いつまでも村人たちに迷惑をかけたくない祇王は、16 歳のとき、ふるさとを出て行く決心をしました。

「祇王や、お父さんが留守の間は、お母さんや妹を頼むぞ。」

戦におもむく前、まだ幼い娘に残した父の言葉を胸に、祇王は祇女と母を連れて京都へ向かいました。

母の前での舞

京都への道のりの途中、歩き疲れた母は道端にしゃがみこんでしまいました。祇王は母を励ましそうとして妹に言いました。

「祇女や、わたしと一緒に舞を踊りましょう。疲れたお母さんに見せて、喜んでいただきましょう。」

祇王と祇女が踊りだすと、母は娘の優しい気持ちがうれしくて、ほほえみながら二人の姿を見ていました。

すると、３人のまわりにたくさんの人たちが集まりだしました。祇王と祇女の２人がそろって踊る舞がたいへん上手だったからです。道を通る人たちはみな歩みを止めて、姉妹の舞に見入りました。

祇王と祇女が踊り終わると、１人の男が、３人に声をかけてきました。

「わたしは京都に長く住んでいますが、これほどすばらしい舞を見たことがありません。わたしが仕えている人にどうしても見せたいので、わたしの家まで来ていただけませんか。」

母と２人の娘はおどろきましたが、今夜泊まるところがない３人は、不安ながらもその男についていくことにしました。

平清盛との出会い

声をかけてきた男は、平清盛に仕えていました。清盛は保元の乱の戦で勝ち、国の政治を自分の思うようにし始めていました。

京都へ来てしばらくすると、祇王と祇女は清盛の前で舞を踊ることになりました。

２人の姉妹は、戦で父をやぶった清盛の前で、母を喜ばせたときのようにやさしい心をこめて舞を踊りました。清盛は２人のあまりにも見事な舞に感心しました。特に、祇王が舞を踊るときの美しい姿に心をひかれました。

清盛は、祇王に近づいて頼みました。

「いつまでもわたしのそばにいて、舞を見せてくれないか。」

その後、清盛は身よりのない３人のために屋敷をつくり、くらしの世話をしました。祇王は、胸の中にしまった父の言葉をかなえるために、清盛が望むようにそばにいて舞を踊ることにしました。

祇王の望み

清盛は毎日のように客を招いては、祇王と祇女の舞を楽しみました。姉妹は時間があれば舞を踊る練習を重ね、清盛にいつも喜んでもらおうと努力しました。ますます見事になる祇王と祇女の舞は、京都だけでなく国中の評判になるほどでした。

そんなある日、清盛は祇王に言いました。

「いつも美しい舞を見せてもらい、本当にうれしく思う。客人たちにも喜んでもらって自慢である。これからも、わたしのそばにずっといてほしい。そこで、祇王の望みは何でもかなえることにした。何か望みを申してみなさい。」

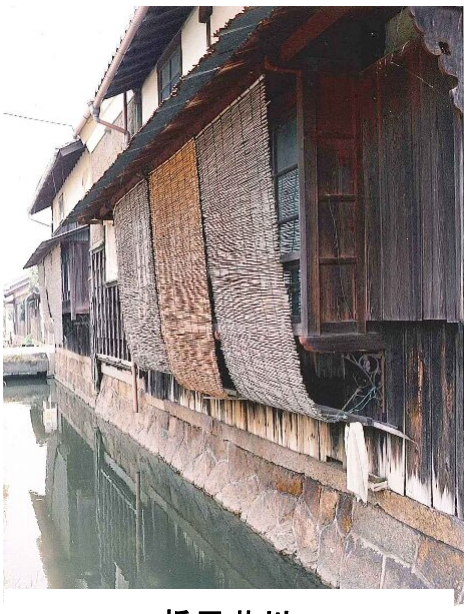
京都に出てきてからも、祇王は、ふるさとでのくらしを決して忘れませんでした。水不足で困っていた村人たちを思って、祇王は願い出ました。

「清盛様、ひとつ望みがあります。わたしたち姉妹が生まれ育った村に、水を引く川をつくってください。」

自分や家族のことではなく、ふるさとの村人を思う望みに、清盛は少しおどろきながら答えました。

「祇王の望みなら、すぐにつくらせよう。」

川をつくるのは大変な工事でした。野洲川から水を引き、ふるさとの村を通って琵琶湖まで流すには、約 12 キロメートル、幅６メートル、深さ６メートルもの川を掘らなければなりませんでした。



祇王井川

しかし、清盛の強い政治の力と工事にたずさわった人たちの努力によって、祇王の望みどおりの川が完成しました。

この川は、祇王の名をとって『祇王井川』と呼ばれました。21 世紀の今でも野洲市の田畑をうるおし、豊かな実りをもたらしています。

仏門へ

祇王と祇女と母の三人は、清盛に大事にされて、京都の人たちがうらやむよう

な生活を送るようになりましたが、長くは続きませんでした。祇王が 21 歳のとき、清盛の前に、仏御前という名前の女の人が現れたからです。

仏御前が踊る姿をすっかり気に入った清盛は、祇王と祇女の舞を見ようとしないばかりか、とうとう３人に屋敷から出て行くように命じました。

政治の中心にいる清盛から嫌われていることを感じた祇王は、祇女と母を連れて嵯峨野の山里に身をかくしました。３人は髪を剃って仏門へ入り、父の供養を続けながら、つつましく心おだやかなくらしを始めました。

季節がいくつか変わったある秋の夕方、３人がくらす小さな家の戸をたたく音が聞こえてきました。おそるおそる戸を開けると、そこには、髪を剃って尼になった仏御前がいました。

いつかは自分も清盛に嫌われ、屋敷を追い出されると感じた仏御前は、うつろいやすい世の中を悲しんで仏門に入り、祇王を訪ねてきたのでした。やさしく仏御前を受け入れた祇王は、嵯峨野で仏の教えを学びながら 38 歳でその生涯を閉じたのでした。

世の中を思うように動かした清盛の政治も長続きはしませんでした。清盛が熱病で亡くなって４年後、1185 年（元暦２年）には、壇ノ浦（今の山口県下関市）で清盛の一族はことごとく滅んでしまいました。

祇王と祇女が亡くなると、ふるさとの村人たちは、姉妹が住んでいた屋敷の近くに妓王寺を建てました。２人をとむらう妓王寺は、祇王と祇女への心からの感謝とともに、ふるさとを思う気持ちの尊さをわたしたちに伝えているのです。